

沖縄県南城市における戦没者慰霊 —旧玉城村・知念村域を中心に—

上 杉 和 央

はじめに

南城市は2006年に佐敷町、知念村、玉城村、大里村の1町3村が合併して生まれた市である。早くも2010年には『南城市史 総合版(通史)』が刊行され、新たな地域的まとまりで歴史や文化をとらえ直す動きがはじまっているが、そのなかに市域の慰霊碑・慰霊祭を見通した記述はない。また、旧町村単位の自治体史においても、『知念村史 第三巻 戦争体験記』⁽¹⁾において旧知念村域の慰霊碑についてのまとまった記述があるほかは、慰霊碑を詳しく取り上げたものは見当たらない⁽²⁾。さらに、慰霊祭の詳細については、いずれの旧自治体史でも触れられていない。

現在、戦後67年が経過し、戦争体験の風化がますます叫ばれるようになっている。そのなかで近年は戦争体験記が多くの自治体史に採録されるようになり、戦争を生き抜いた者たちの体験や記憶の一部——それはまさにごく一部ののだが——については、記録として後世に残さるようになった。このような動きには一定の評価を与えてよいだろう。

その一方で、戦争で命を落とした者たちへの思いから建立された慰霊碑やその思いが表出する慰霊祭についての記録化はまったくと言ってよいほど進んでいない。「風化」の危機にさらされているのは、戦時中の体験ではなく、むしろ戦後の体験であるとさえ言える。実際、戦後直後に建立された慰霊碑については、その建立状況を知る人物のほとんどはすでに他界しており、その具体的な様相を知ることはきわめて困難となっている。このような「風化」に対して、既存の市町村史の記述は、残念ながらほとんど効果を發揮していないのである。また、次章で概観するように、その他の資料・文献についても同様である。

だからこそ、地域の慰霊碑・慰霊祭の歴史およびその変化については、地域に入りこみ、古老たちの言葉を書きとどめることが喫緊の課題の1つとなる。確かに、今の「古老」は、多くの場合、慰霊碑建立時の「子ども」であり、建立当時の状況までは覚えていないことがほとんどである。しかし、建立後の後の経過・変遷については、やはり示唆的な情報を多く持っているのであり、その記録化は不可欠である。

また、地域に根ざした慰霊碑・慰霊祭の歴史をひも解くことは、これまで米軍統治・復帰運動・

基地問題といった中央における「対外」関係が強調され、その他の側面が見落とされがちであった戦後沖縄史に、異なる側面を付け加えることにもなるだろう。慰霊の問題は、沖縄戦をどのように記録・記憶し、またそれらを共有しようとしてきたのかという問題である。慰霊碑はそのようなコメモレイションが景観に可視化されたものであり、慰霊祭はその空間に込められた意味がきわめて鋭利に表出されるイベントである。沖縄戦の持つ意味が沖縄の現在に深く影響しているという一般的な評価をふまえれば、このような点から戦後沖縄史にアプローチすることには一定の意義があるだろう。

筆者は2002年より沖縄県内にある慰霊碑・慰霊祭の調査を継続的に実施し、いくつかの成果を報告してきた⁽³⁾。また、そのような個人調査に加え、2010年度からは「地理学実習」の現地調査を沖縄県内の市町村と定め、学生と一緒に調査を実施している⁽⁴⁾。2012年度の調査地は南城市であった。小稿では本年6月19日～26日に実施した「地理学実習」の現地調査時に行った調査⁽⁵⁾、およびこれまでに実施してきた慰霊碑・慰霊祭調査⁽⁶⁾によって調査の進んだ旧玉城村・旧知念村域を取り上げ、得られた知見をまとめることで、地域の慰霊碑・慰霊祭の記録化の一助としておきたい。なお、南城市全体の特徴については予察的に述べるにとどめ、旧大里村・旧佐敷町域についての詳細な調査の後に、改めて南城市全体を論じる機会を設けることにしたい。

1 慰霊碑把握の現状

表1は南城市域にある慰霊碑のうち、現在把握できているものの一覧である。南城市の慰霊碑は、沖縄県庁内に建立されている2基を除くと、すべて区自治会ないし地方自治体による建立である。なお、地方自治体の慰霊碑を持っていたのは旧大里村、旧佐敷町、旧玉城村、南城市であり、旧知念村にはなかった。

表1をみると、南城市域の慰霊碑の多くは1970年代までに建立されていることが分かるが、それらが慰霊碑一覧に掲載する書物のなかに登場するのは1983年の沖縄県生活福祉部援護課による刊行書が初めてとなる。このような傾向は中城村でも確認されたことであり⁽⁷⁾、また全県的な把握数もこの書から格段に増加することから⁽⁸⁾、南城市域だけの特徴とすることはできない。

ただ、旧大里村域の慰霊碑については、その後、やや特異な経過をたどる。1983年に掲載されていた慰霊碑が、村立の「島添之塔」(表1・ID21。以下、慰霊碑についてはID番号のみ表示)を除いて、1995年・98年に同じく沖縄県生活福祉部援護課が刊行した後継書からは見えなくなるのである。再び登場するのは2007年の後継書(刊行主体は沖縄県平和祈念財団に移行)になってからである。このような経過をたどった理由は不明であるが、沖縄県が一時期、旧大里村の区自治会レベルの慰霊碑を把握していなかったことが分かる。2007年刊行の後継書については、先行書の内容をふまえつつ作成されたと思われるが、一部新しい内容も含まれている点で評価できる。ただし、たとえば旧大里村が建立した「平和の礎」(ID33)といった自治体レベルの慰霊碑が漏れるなど、その内容は十分とは言えない。

表1 南城市の慰霊碑一覧

ID	塔・碑名	旧村・大字	建立 年月日	建立者	備考	A 奉賛会 (1962)	B 山城 (1970)	C 沖縄県 (1974)	D 援護課 (1983)	E 連絡会 (1983)	F 援護課 (1995)	G 援護課 (1998)	H 歴博 (2003)	I 平祈 (2007)	J 大田 (2007)
1	慰霊之塔	大里・大里（南風原）	Q19470715	南風原区自治会	納骨堂？				○					○	○
2	平和祈念塔	佐敷・手登根	19471010	宮城源太郎	個人				○		○	○	○	○	○
3	慰霊之塔	大里・大里（西原）	19480500	西原区											○
4	大東亜戦争 沖縄戦 線戦没者之墓	玉城・糸数	19480831	区民											
5	慰霊之塔	大里・古堅（古堅）	19490414	古堅区自治会	忠魂碑の転用				○					○	○
6	安久仁の塔	知念・安座真	19510304	区自治会					○		○	○	○	○	○
7	和魂之塔	知念・知念	19510909	区自治会					○		○	○	○	○	○
8	慰霊之塔	大里・高平（高宮城）	19511020	高宮城区自治会	納骨堂？移設				○					○	○
9	靖魂之塔	知念・志喜屋	19511025	区自治会					○		○	○	○	○	○
10	英魂之塔	知念・知名	19520530	区自治会					○		○	○	○	○	○
11	慰霊之塔	大里・高平（平川）	19521200	平川区自治会	納骨堂？移設				○					○	○
12	邦守之塔	知念・海野	19530503	区自治会					○		○	○	○	○	○
13	慰れい塔	佐敷・佐敷	19530622	仲里清徳	個人				○		○	○	○	○	○
14	忠魂之塔	知念・久原	19531118	自治会					○		○	○	○	○	○
15	慰霊之塔	知念・吉富	19540103	区自治会	2003 改築				○		○	○	○	○	○
16	慰霊之塔	大里・稲嶺（稲嶺）	19540810	稲嶺区自治会	納骨堂？				○					○	○
17	慰魂之塔	知念・山里	19541121	区自治会					○		○	○	○	○	○
18	慰霊塔	佐敷・津波古	19541204	森田松夫	個人				○		○	○	○	○	○
19	慰霊塔	佐敷・小谷	19550320	城間重吉	個人				○		○	○	○	○	○
20	慰霊之塔	知念・久手堅	19550825	区自治会	S59.8.12 移動				○		○	○	○	○	○
21	島添之塔	大里・大里（大里村）	19560622	大里村					○		○	○	○	○	○
22	忠霊之塔	佐敷・富祖崎	19570813	屋比久孟三郎	個人				○		○	○	○	○	○
23	慰霊塔	佐敷・伊原	19600115	当真嗣仁	個人				○		○	○	○	○	○
24	慰霊碑	佐敷・佐敷	19640200	佐敷町											○
25	慰霊碑	佐敷・仲伊保	19650600	知念前徳	個人				○		○	○	○	○	○
26	慰霊碑	佐敷・仲伊保	19700700	小波津和一					○					○	
27	慰霊塔	佐敷・屋比久	19700800	宮城徳三	個人				○	○	○	○	○	○	○
28	慰霊之塔	玉城・屋嘉部	19710601	玉城村					○		○	○	○	○	○
29	慰霊之塔	大里・大城（稲福）	19721200	稲福区自治会					○					○	○
30	戦没収容者慰霊碑	知念・具志堅	(碑文すべて は読めず)	沖縄刑務所	『昭和四十●年十●月建立』とあり 1978 年沖縄刑務所移動 1978 年沖縄刑務所移動。移動前 にもあり。現在のものは再建										
31	殉職職員慰霊之碑	知念・具志堅	19790300	沖縄刑務所					○		○	○	○		○
32	慰霊碑	玉城・前川	19861103	区自治会											
33	平和の礎	大里・大里（大里村）	19950800	大里村											○
34	絆之碑	大里・大城（大城）	20050600	石碑を立てる会											○
35	慰霊之碑	玉城・中山	20100618	南城市											

○：記載あり 網かけ部：年代的に無記載であってよい部分 年月日中の Q：旧暦を指す
(備考) 慰霊碑名は現地調査にもとづき、碑文通りに記載している。また配列は建立年次順とした。

A～G はそれぞれ下記を示す。

- A. 奉賛会 (1962)：沖縄戦没者慰霊奉賛会『沖縄の霊城』沖縄戦没者慰霊奉賛会、1962
B. 山城 (1970)：山城善三『慰霊塔案内』大同印刷工業、1970
C. 沖縄県 (1974)：沖縄県編『沖縄の霊城』、1974
D. 援護課 (1983)：沖縄県生活福祉部援護課『沖縄の霊城』、1983
E. 連絡会 (1983)：靖国神社国営化反対沖縄キリスト者連絡会編『戦争賛美に異議あり！』
F. 援護課 (1995)：沖縄県生活福祉部援護課『沖縄の慰霊塔・碑』、1995

- G. 援護課 (1998)：沖縄県生活福祉部援護課『沖縄の慰霊塔・碑』、1998
H. 歴民博 (2003)：国立歴史民俗博物館『近現代の戦争に関する記念碑』、2003
I. (財)平祈 (2007)：財団法人沖縄県平和祈念財団『沖縄の慰霊塔・碑』、2007
J. 大田 (2007)：大田昌秀『沖縄の「慰霊の塔」』那覇出版社、2007

(備考2) 建立年月日欄の斜体は各書の数値が異なるものであり、慰霊碑への記載情報をもとに正確な年月日に改めた。ただし、初代の慰霊碑が現存しない旧知念村吉富区・久手堅区については『知念村史 第3巻 戦争体験記』（知念村役場、1994）287 頁によった。

その点、同年に刊行された大田昌秀の著書は、慰霊碑がこれまでのなかでもっとも網羅的なかたちで掲載されている点で注目すべき成果である。しかし、たとえば大田の一覧表に初めて現れた旧大里村・西原区の「慰霊之塔」(ID3)は既に撤去されたものであり、現地で十分な確認調査にもとづいた一覧とはなっていない。

また、旧玉城村・前川区のように、これまでに一度も取り上げられてこなかった慰霊碑も存在する。このような点をふまえるならば、やはり地域に赴き、1つ1つ調査を重ねていくことが、迂遠に見えつつも着実な方法と言えるのではないか。

次章以下は、旧玉城村域と旧知念村域について、その迂遠な方法で調査を行った内容である。

2 旧玉城村域の慰霊碑・慰霊祭

(1) 概要

旧玉城村域には、現時点で4基の慰霊碑が確認されている(表1)。このうち、「慰霊之碑」(ID35)は南城市の慰霊碑であり、おそらく沖縄県内でもっとも新しい慰霊碑である。残る3基のうち、既存の書物に取り上げられたのは、旧玉城村の慰霊碑「慰霊之塔」(ID28)のみであり、糸数区「大東亜戦争沖縄戦線戦没者之墓」(ID4)および前川区「慰霊碑」(ID32)については、これまで既存書にはまったく触れられていなかった慰霊碑である。これまでに収集した新聞資料においても、糸数区の慰霊碑について2009年3月20日付『琉球新報』に慰霊碑のさい銭箱が盗難にあった記事があるのみで⁽⁹⁾、前川区の慰霊碑については確認できなかった。

(2) アブチラー納骨所と慰霊碑

糸数区の「大東亜戦争沖縄戦線戦没者之墓」(ID4)は、アブチラガマ(糸数壕)のC地区出口付近に建てられている(写真1)。建立地の背後は大きな窪みとなっている。2012年6月23日12時から実施された慰霊祭の前後に、慰霊祭に出席していた地元住民に聞き取り調査を行ったが⁽¹⁰⁾、戦後、糸数区の住民はその窪みに戦没者の遺骨を集めており、そのような集骨・納骨作業に伴って建立されたのがこの慰霊碑であるという。建立年月日が1948年8月31日と早いのも、そのためである。碑銘が「墓」となっているのは、ここに遺骨が納められていたからにはかならず、建立当時はまさに墓標として機能したのだろう。

集められた遺骨について、聞き取り調査に応じた区民の方は、いつその場からなくなったのか、どこに行ったのかといった点については記憶がない、とのことであった。しかし、沖縄県遺族連合会30周年記念誌『還らぬ人とともに』によれば⁽¹¹⁾、「アブチラー納骨所」の遺



写真1 「大東亜戦争沖縄戦線戦没者之墓」(旧玉城村糸数区)

撮影：上杉和央(2012年6月23日)

表2 中央納骨所へ転骨した現南城市域の納骨所

旧町村名	塔名	柱数	備考
玉城村	親ヶ原納骨所	80	親ヶ原在
	奉魂之塔	150	愛知在
	アブチラー納骨所	130	糸数在
大里村	納骨堂	500	高宮城在
	納骨堂	50	真境名在
	慰霊之塔	400	当間在
	慰霊之塔	400	仲程在
	島添之塔	3,000	内原在

典拠) 財団法人沖縄県遺族連合会編『還らぬ人とともに』1982、214-217 頁
塔名・備考の記述も上記典拠本そのままとした。

骨が那覇市識名にあった中央納骨所に移されたことが記載されており、移動先については中央納骨所であったことはほぼ間違いない⁽¹²⁾。その一方、時期については、中央納骨所が建設された1957年以降、上記30年誌の記された1982年の間ということ以上は判然とせず、さらなる資料収集が必要である。

なお、上記『還らぬ人とともに』には中央納骨所に転骨された納骨所の一覧が掲載されているが、現南城市域については、「アブチラー納骨所」を含め8ヶ所の納骨所が挙げられている(表2)。そのうち、旧玉城村域には「アブチラー納骨所」のほかに「親ヶ原納骨所」(親ヶ原)と「奉魂之塔」(愛知)の名前が見える。「親ヶ原」とは親慶原(区)のことであろう。いずれにしても、親慶原区と愛知区については、今回の現地調査では慰霊碑(納骨堂)があった情報を確認することはできず、また両地域で現在慰霊祭が行われている事実もなかった。このように、納骨堂に集められた遺骨が転骨してしまった後は慰霊行事がなされない事例は、糸満市域でも確認されている⁽¹³⁾。糸満市域においては、慰霊行事がなされていない理由として、地域とは「無縁」の遺骨であったと感じていた場合、もしくは集合的に慰霊された方がよいと判断される場合などがあった。親慶原区や愛知区においては、どのような状況であったのか(あるのか)、さらなる調査が必要だろう。

慰霊祭がなされていない親慶原区・愛知区に対して、糸数区では慰霊祭がなされている点が異なっている。聞き取り調査によると、糸数区の慰霊祭の開始は2009年に現在の當山晃区長が区長に就任してからである。それ以前には行われていなかった(もしくは開催された記憶がない)ということであり、そもそも慰霊祭は行われていなかったか、長期にわたって慰霊祭が開催されていなかったということになる。少なくとも遺骨が転骨してからは、慰霊祭の開催はないのではないと思われる⁽¹⁴⁾。

区長によれば、2009年の慰霊祭の開始は、糸満市摩文仁区で開催される沖縄全戦没者慰霊祭に行けないという区民の意見を受けてのものであったという。南城市で開催される区長会議の際

に、区長が小谷区など他の地区での慰霊祭の実情を調査した上で、区での慰霊祭を実施するようになった。新規に慰霊祭がなされる場合に周辺の慰霊祭が参照されることがうかがえる点で、大変興味深い事例である。

(3) 記念と慰霊

前川区の「慰霊碑」(ID32)は前川神社(知念之殿)前の広場の一角に建てられた慰霊碑である(写真2)。建立年が新しいため(表1)、建立経緯が分かるのではないかと期待しつつ、2012年6月23日17時過ぎより実施された慰霊祭に参加し、その前後に区民の方への聞き取り調査を行った。その結果、慰霊祭は慰霊碑建立後に開催されるようになったこと、読経を行った東本願寺沖縄別院の徳本尚一氏は地元出身で、帰郷した2010年より慰霊祭に参加するようになったが、それまで読経等は実施されていなかった、といった情報を得



写真2 「慰霊碑」旧玉城村前川区
撮影：上杉和央(2012年6月23日)

ることができた⁽¹⁵⁾。一方、この慰霊碑建立には区民であった中村康雄氏が深く関与していたことが明らかとなった。ただし中村氏は2011年に他界しており、現在、その経緯を詳しく知る者はいない(少なくとも慰霊祭参加者にはいない)とのことであった。

碑の裏面には「第二次大戦戦没者／前川移居二百五拾周年記念碑／昭和六十一年十一月三日建立」とあり、また前川神社(知念之殿)の鳥居に「前川誌／発刊記念建立／昭和六十一年十一月三日」ともあったため、前川区の移住250周年記念の一環で字誌の発刊⁽¹⁶⁾や前川神社の整備があり、その一環に慰霊碑建立があった可能性が高いことはうかがえたのだが、それ以上の経緯についてはまったくの不明であった。

そのようななか、沖縄の民俗や歴史文化をきわめて精力的に調査されている井口学氏から、井口氏が1999年11月17日・12月7日に中村氏への聞き取り調査をされ、そのなかで慰霊碑建立についても話を聞いたという情報を得た。しかも、井口氏自身が丁寧にまとめた貴重な聞き取り調査記録を提供していただけたこととなった。井口氏に特に記して謝意を表し、井口氏の聞き取り成果および前述の字誌をもとに建立の背景および経緯を記しておきたい。なお、事実誤認があるとすれば、それはすべて筆者の責任である。

1736年に現在地に移動してきた前川村(区)は、1986年に250周年を迎える。1984年、250年間の記録を残すべく字誌の発刊が区民常会で可決され、編集が開始された。編集委員会の委員長には中村康雄氏が就任した。また、250周年の祝典・記念行事についても企画されたが、記念事業実行委員会の委員長もまた中村康雄氏であった。

中村氏は「前川誌の編集にあたって」という文章のなかで字誌発刊の経緯を語っているが、その中に次のような文を載せている。

私達は、今こそわが村の祖先の偉業を偲び、先祖の残したかけがえのない文化遺産を守り、その歴史を掘り起し、後世に伝えていくのが最も大切なことだと信じています。

また、今次大戦に於いて、前川区でも三百八十余人の戦没者を出し、大きな犠牲をはらっています。私たちはその犠牲を無駄にせぬよう慰霊塔を建立して、心からその霊を慰め供養する義務もあると思います。そうすることによって平和を守る精神を養い、私達の子孫にあるむごたらしい戦争をまたと体験させないようにしなければならないと思います。この前川字誌にはその意味も含めて区民の戦争記録に多くのページをさいてあります。⁽¹⁷⁾

これを見ると、沖縄戦は二度と繰り返すべきではない村の歴史として語り継ぐ必要があり、そのためにも戦没者慰霊が重要であると認識されていることが分かる。中村氏のこのような思いが、250 周年記念事業の一環に慰霊碑の建立を位置づけようという提案につながっていくことになる。

しかし、その提案は当初、委員会の賛同が得られなかった。それは予算面の問題からである。確かに、字誌に記される記念事業全体の予算総額（決算額）が 150 万円であったのに対し、石材業者による慰霊碑建立の見積額は 160 万（少なくとも 120 万）というものであり（井口氏聞き取り）、事業規模に見合うものではなかったと言えるだろう。

このような状況に対して、中村氏は自らの私費を投入するので慰霊碑を建立したいと訴え、その強い気持ちに応える形で委員会も建立を認めることになったのだという。中村氏の思いは先の引用文でもうかがえるところである。

ただし、最終的には慰霊碑建立費は記念事業費の中からねん出されることになった。それは、石材を新しく購入するのではなく、「知念之殿の隣にあった岩（羽をひろげたハトに似ている）」（井口氏聞き取り）を重機で運び慰霊碑とする案が採用され⁽¹⁸⁾、建立にかかる経費が 22 万円で収まったためである。

慰霊碑の除幕式は 1986 年 11 月 3 日の前川区移居 250 周年記念式典のなかで執り行われた。字誌の発刊日も同年同日となっているが、除幕式を含む式典当日の写真が掲載されていることからみると、実際の刊行は記念式典後であったのだと思われる。井口氏による中村氏への聞き取りによれば、「慰霊碑の中に、霊石と字誌、すべての種類のお金（日本のもの）をビニールにつつんで、埋めた」ということである。字誌が式典後の完成であったとするならば、この行為もまた除幕式当日もしくはそれ以前ではなく、字誌の実際の刊行後であったということになるだろう。

いずれにしても、前川区の慰霊碑建立は、区を代表する人物の強い思いを背景としつつ、区の歴史のなかに沖縄戦を位置づけ、地域の歴史を記念・顕彰する行為の一環として展開した点で、きわめて特徴的な事例となる。実際、慰霊碑の建立された場所は、前川村が現在の場所にうつった際にそれまでにあった他の 4 つの殿を合祀されて村落の中心となった知念之殿の隣接地である。周辺には嘉慶 25 年（1820）の玉城按司の参拝を記念した灯籠、大正 3 年（1924）の皇太子殿下御成婚碑、昭和 29 年（1954）の村興運動記念碑がたっており、知念之殿とその周辺の空間はまさに地域の歴史が記録化された記念空間となっている。そのなかに移居 250 周年記念と沖縄

戦（戦没者）という2つの事歴があらたに可視化される形で記念（祈念）されたのが、この慰霊碑建立であった。

このようにとらえた場合、戦没者慰霊が村の歴史の継承という意味でうまく機能しているかについては、やや疑問が残る。前川区の慰霊祭では、区の役員と戦争体験者が中心となっており、戦後世代、とりわけ20代以下の若い世代については参加をみることができなかった。当日はハリーと重なっていたこともその原因であろうが、やはり歴史の継承という点でみれば、慰霊祭がその機能を十分に担っているとは言えない状況にあるように思われる。沖縄戦もしくは戦没者慰霊を体験者や遺族だけの記憶とせず、地域の歴史の不可欠な要素としてとらえる試みは県内各地でなされている。そのような際、慰霊祭を地域のなかでどのように位置づけていくのかが大きな課題となるだろう。

なお、2012年6月の聞き取りの際、現在の慰霊碑の建立以前に、戦没者の遺骨を収容した納骨堂があったと記憶する方がいたことを付言しておきたい。前川区の住民は、戦後直後は知念の収容所に集められていた。帰村すると周辺に遺骨がいくつも確認される状況であり、そのため前川区から船越区のパス停に向かう道沿いの畑の一角に納骨堂がつくられたのだという。聞き取りによれば「玉城村で魂魄之塔にもっていった後は、船越の方の個人有地のため取り壊し、畑地に戻した」ということであった。このうち、「魂魄之塔にもっていった」というのはおそらく誤認で、他地域での調査もふまえるならば、那覇市の中央納骨所だったと思われる⁽¹⁹⁾。

いずれにしても、このような納骨堂があったならば、先の表2に登場してもいいのだが、前川区に納骨堂があったという記載はない。ただし、表2にみえる「愛知在」の「奉魂之塔」が、今回の聞き取りに出てきた納骨堂に該当する可能性がある。というのも、前川区の集落と船越区の集落を結ぶ道は、愛知区の地所になるからである。聞き取りにおいては、その納骨堂はブロックないしコンクリートでできており、その上部に碑があり、碑名が刻まれていたということであった。これ以上の推測は控えねばならないが、1つの可能性として提示しておきたい。

(4) 自治体の慰霊碑

旧玉城村域には「慰霊之塔」(ID28)と「慰霊之碑」(ID35)という自治体建立の2つの慰霊碑がある。

「慰霊之塔」は旧玉城村時代に村が建立した慰霊碑で、玉城中学校の東南角に建っている（写真3）。慰霊碑自体に建立年月日は記載されていない。各書を見ると1971年6月1日の建立とされているが（表1）、新聞記事によれば、実際に除幕式がなされたのは1971年7月21日であった⁽²⁰⁾。当日は慰霊祭も実施されたようである。この記事のなかで注目されるのは、「これまでも「平和の塔」としての慰霊碑が玉城中校の敷き地内に建っていたが、同校の校舎新築のため移転することになり、総工費二千五百ドル余で新しく建立された」という一文である。これより、現在見える「慰霊之塔」は再建されたものであり、以前は「平和の塔」という慰霊碑があったことが分かる。記事に従えば、同じ玉城中学校内の敷地で移転したのだろう。

前身の「平和の塔」については情報がきわめて乏しいが、1956年11月22日付の『琉球新報』および『沖縄タイムス』に、11月24日に玉城中学校校庭の「平和の塔」前で戦没者慰霊祭を挙げる旨の告知が見える⁽²¹⁾。慰霊祭の告知が掲載されるのは、両紙ともこの1度限りであり、この時の慰霊祭が特別なものであったことがうかがえる。あるいは、この時が建立除幕を兼ねた慰霊祭であった可能性もあるだろう。

一方、「慰霊之碑」は2010年6月18日に南城市遺族連合会・南城市によって建立された慰霊碑である（写真4）。慰霊碑の横には碑文があり、次のような文章が掲げられている。

平成十八年一月一日、佐敷町、知念村、玉城村、大里村が合併し南城市が誕生した。

これを機に日露戦争、日中戦争、太平洋戦争によって尊い一命を捧げられた御霊を旧町村慰霊碑から合祀し、恒久平和の切なる願いをこめて、市民はじめ全遺族の総意を結集し、この碑を建立する。

平成二十二年六月十八日 建立

南城市遺族連合会

南城市

ここに刻まれた2010年6月18日に、「慰霊之碑」の前で初めての南城市戦没者慰霊祭が行われた。南城市のウェブサイトにもその模様が報告されているが⁽²²⁾、「前年までは各地区の慰霊碑で行われていた慰霊祭ですが、今回、新しい慰霊之碑に戦没者の御霊を合祀しました」とあり、新たな市域を単位とした慰霊祭としては2010年が初めてであったことが分かる。また、このとき「佐敷・知念・玉城・大里の四遺族会からなる「南城市遺族連合会」が結成」されており、各地区の遺族会の単位を残しつつ、連合会という形で市域を単位とする遺族会が結成されたことが分かる。

その後、南城市戦没者慰霊祭は2011年6月16日⁽²³⁾、2012年6月22日⁽²⁴⁾に実施されていることが確認できる。



写真3 「慰霊之塔」旧玉城村屋嘉部区
撮影：上杉和央（2007年6月24日）



写真4 「慰霊之碑」旧玉城村グスク
ロード公園内
撮影：上杉和央（2012年6月25日）

3 旧知念村域の慰霊碑・慰霊祭

(1) 概要

旧知念村域には11の区があるが、久高区（久高島）を除くすべての区に慰霊碑が建立されている。また、旧知念村域には11基の慰霊碑が確認されているが、うち9基についてはすべて区

表3 南城市・旧知念村域の慰霊祭の祭日の変化

区名	知念村 (1994)	知念村文化協会 (2006)	府大調査 (2012)	備考
志喜屋	旧9月9日	6月23日	6月23日	
山里	旧9月9日	6月23日	6月23日	
具志堅	-	-	-	慰霊碑なし
知念	旧9月9日	6月23日	6月23日	
吉富	6月23日	6月の下旬	6月23日	
久手堅	旧7月16日	旧7月16日	未調査 (6月23日以外)	
安座真	6月23日	5月第4日曜日	未調査 (6月23日以外)	
知名	6月23日	5月最後の日曜日	未調査 (6月23日以外)	
海野	6月23日	5月16日	未調査 (6月23日以外)	
久原	6月23日	6月下旬	未調査 (6月23日以外)	2003年は6月29 日に実施。
久高	-	-	-	慰霊碑なし

知念村（1994）：知念村史編集委員会編『知念村史 第三巻 戦争体験記』、1994。知念村文化協会（2006）：知念村文化協会学術部編『知念村の御嶽と殿と御願行事』南城市文化協会、2006。

自治会によって管理されているものであり、1つの区に1基となっている。残り2基は2基の慰霊碑は沖縄刑務所内に建立されたものであり、管理も沖縄刑務所である。沖縄刑務所が位置している具志堅区には区自治会の関わる慰霊碑はない。本島部についていえば、具志堅区だけが慰霊碑を持っていないことになるが、その理由について地区内を歩いている住民の方に尋ねたところ、具志堅区は小さい（人口が少ない）からではないか、もしくは区としての成立が新しいからではないか、といった意見を得た。ただ、それらの根拠となる資料等は見つけられておらず、理由としては判然としないのが現状である。

いずれにせよ、ほとんどの区に区自治会の管理する慰霊碑があるという点は、旧知念村域の大きな特徴であり、他の南城市域内の旧町村にはそのような傾向は見られない。もう少し範囲を広げて探すと、たとえば旧勝連町や旧与那城町（島嶼部除く）のある勝連半島域、その根元にあたる旧具志川市、また北部の恩納村や本部町、今帰仁村などには多くの区に自治会管理の慰霊碑があり、必ずしも旧知念村域だけが持つ特徴というわけではないが、こと南部に限って言うならば、他にはない分布状況となっている⁽²⁵⁾。

2012年の場合、志喜屋区、山里区、知念区、吉富区の慰霊祭が6月23日に実施され、このうち山里区を除く3地区については現地調査を実施することができた。開催日については、『知念

村史 第3巻 戦争体験記』には「字志喜屋、山里、知念では旧暦の九月九日、久手堅では旧暦七月十六日に他の字では六月二十三日の沖縄県慰霊の日に」実施していると記載がある⁽²⁶⁾。また、2006年に刊行された旧村域の祭祀関連施設調査に関する著作のなかでは、上記とは異なる慰霊祭の日時が報告されている⁽²⁷⁾。これらをまとめると表3となるが、村史の作られた1994年の段階で6月23日に実施されていた区の多くが、2000年代に入ると開催日を6月23日以外にうつし、一方1994年段階では6月23日以外に実施していた区の多くが2000年代に入ると6月23日に変更しているという興味深い変化を確認することができる。表3内での区は、知念半島を南から北にむかって進むようなかたちで配列しているが、大きく見れば、南部と北部で6月23日開催という様相が逆転していることになる。このほか、後述のように聞き取り調査のなかで、たとえば志喜屋区の場合、以前は6月22日に実施されていたとあるとか、吉富区の場合、以前は6月23日以外の日に実施していたといった意見を得ることができた。これらの意見の裏付けを検討していく必要があるが、表3掲載の慰霊祭開催日と異なるこれらの点についてもくみ取って考えていく必要がある。

いずれにしても、慰霊祭の開催日は固定的なものではなく、また「慰霊の日」である6月23日に収斂していつているわけでもないことは明確である。このような点は、記念日と集合的記憶をめぐる重要な問題であり、他地域の事例をさらに検討する必要があるだろう。

これらの概観をふまえつつ、以下、各区の慰霊碑や慰霊祭の特徴について知り得た点をまとめていきたい。

(2) 志喜屋区

志喜屋区の慰霊碑「靖魂之塔」(ID9)は裏面に「一九五一
年十月二十五日建立」と刻まれている(写真5)。建立
地は「トゥンチ山」⁽²⁸⁾(もしくは「トンチ山」⁽²⁹⁾)西
方の岩石地である。トゥンチ山は「神の山」と崇拝され、
殿や戦前は村屋があった。戦後、集落の広場を作るた
めに何度か整地が実施されたために、大きく景観を変
えたが、今なお「神が降臨する山」として位置づけら
れる集落の聖地である⁽³⁰⁾。慰霊碑の周辺には御嶽や殿
のほか、戦前から戦後直後にかけて地区のために尽力
した親川栄蔵を記念した「親川栄蔵頌徳碑」がある。



写真5 「慰霊之塔」旧知念村志喜屋区
撮影：上杉和央(2003年6月25日)

志喜屋区の慰霊碑・慰霊祭については、2012年6月23日に「地理学実習」の一環で調査を行っている。現地調査および地域住民への聞き取り調査をまとめた大井によれば⁽³¹⁾、慰霊祭が開始されたのは慰霊碑が建立された次の年からであり、当初は6月22日であったが、その後6月23日に変化したという。日にちの変更は、「慰霊の日」の移動に関わるのだろう⁽³²⁾。ただ、前述のように、この聞き取り成果と『知念村史』の記述とでは齟齬をみせることになる(表3)。少な

くとも聞き取り調査では「旧9月9日」の開催についての記憶について、証言は得られなかった。この点についてはさらなる検討が必要だが、慰霊祭の記録や記憶がきわめて「ゆらぎ」のあるものであることを端的に物語っているだろう。

(3) 山里区

山里区は南東向きの斜面に展開し、「慰魂之塔」(ID17)は集落の西側にある旧道に位置している(写真6)。空中写真などを見る限り、この道は海岸部と内陸部を結ぶ主要道の1つであったと推測されるが、2012年6月25日現在、道路は途中から草で覆われ、通行は不可能となっている⁽³³⁾。

「慰魂之塔」は集落西側から旧道を少し登り、北西側に分岐する道を進んだところにある。一帯はハジシ御嶽であり、ハジシカー、元カーの2つの井泉、3つの拝所があるなど、特別な空間として認識されている地に建立されている⁽³⁴⁾。現地調査時には確認できなかったが、背後にある洞穴では、戦時中、山里区の住民がそこに一時避難していたこともあったようである⁽³⁵⁾。ハジシ御嶽が慰霊碑の設置場所と決定される際、このような避難所であったという点が考慮された可能性もあるだろう。また、慰霊碑の建立場所からは海が眺望できる。

「慰魂之塔」は「一九五四年十一月二十一日建立」であり、周辺の志喜屋区や知念区(後述)の慰霊碑よりも3年ほど遅れて建立されている。慰霊碑の形状を見ると、この3地区は同じような形状をしており、あるいは「慰魂之塔」建立に際して、志喜屋区や知念区の慰霊碑が参考にされたのかもしれない。



写真6 「慰魂之塔」旧知念村山里区
撮影：上杉和央(2012年6月25日)

(4) 知念区

知念区の「和魂之塔」(ID7)は集落の中心からはやや南に外れた広場に位置しており、近くには旧波田真村の殿である「波田真殿」がある⁽³⁶⁾。碑の裏面には「一九五一年九月九日」と刻まれており、旧知念村域のなかでは安座真区に次いで古い建立である(写真7)。

「和魂之塔」には2003年6月27日、2007年6月24日、2012年6月26日に訪れて現地調査を行ってきた。筆者自身による聞き取り調査はいまだ実施できていないが、2012年6月23日に「地理学実習」による慰霊祭調査が実現したため、間接的ながら聞き取り調査が実



写真7 「和魂之塔」旧知念村知念区
撮影：上杉和央(2012年6月26日)

現した。その成果によると⁽³⁷⁾、建立時から場所についての変化はないということであった。

ただし、「和魂之塔」自体には近年、変化があった。2011年に慰霊碑の改修が行われたのである(写真7・8)。慰霊碑の石材は変化していないが、石材の表面がクリーニングされ、線刻された文字に墨入れがなされた。また台座部も改修前と同じ石材を基本的には利用しているが、風化の激しい天井部については全面的にコンクリートで補修され、白色に塗装されている。さらに以前はコンクリートで作られていた「戦没者氏名」プレート

トが、黒御影石製のものに作り替えられている。2007年の時点でプレートはひびが入り、大きく3つに割れているような状況であったため、改修にあたって新たに作られたのだと思われる。

慰霊碑だけではなく、その周囲を取り囲む塀や慰霊碑までつながる階段・通路についても改修がなされ、全体として「和魂之塔」の印象は大きく変わった。



写真8 「和魂之塔」旧知念村知念区
撮影：上杉和央（2007年6月24日）

(5) 吉富区

吉富区の「慰霊之塔」(ID15)は1954年に集落の西部に位置した砂糖小屋の跡地に建立された⁽³⁸⁾(写真9)。その建立は周辺の地区が慰霊碑を建立していたのを受けてのことであったという⁽³⁹⁾。表1に挙げた各書では建立年月日が「1954年」もしくは「1954年1月」までしか記載されていないが、『知念村史』には「1954年1月3日」建立とされている⁽⁴⁰⁾。また、他の慰霊碑と同様、同書の口絵にも紹介されており、その姿を確認することができる。

2003年6月25日に現地を訪れた際は、慰霊碑を見つけることはできなかった。それは同地が1994年度の農村総合整備モデル事業によって「吉富農村公園」に整備されたからであり、それを期に慰霊碑は撤去されていたのである⁽⁴¹⁾。撤去の事情を地区の古老に尋ねたところ、建て替え場所は公民館の横と決まっていたのだが、資金の問題などがあってこれまで再建できていなかった、ということであった。また、公民館のすぐ脇には、慰霊碑につけられていたコンクリート製の「大東亜戦々没者」・「慰霊之塔建立寄付者芳名」のプレートが置かれていた。この時にはこれらのプレートは再利用が考えられているのだろうと想像していた。

その後、吉富区では慰霊碑が再建されることになった。筆者がそのことを知ったのは2007年6月24日のことであり、4年ぶりに再訪したところ、再建予定地であった場所に「慰霊之塔」が完成していたのである。初代の慰霊碑はコンクリート製の塔状であったが、再建された慰霊碑は



写真9 「慰霊之塔」旧知念村吉富区
撮影：上杉和央（2007年6月24日）

自然石を活用したものとなり、正面から見た形状は三角形となった。

余談だが、この新たな慰霊碑については驚いた点が2つある。1つは建立時期である。慰霊碑の台座裏側に記された建立年月日を確認すると「2003年7月吉日建立」となっていた。すなわち、最初の訪問からわずか1カ月後にはこの慰霊碑が建てられていたのである。もう1つは2003年の訪問時に確認した「大東亜戦々没者」および「慰霊之塔建立寄付者芳名」のプレートが再建慰霊碑には使われていなかった点である。前者については戦没者名自体が新たな慰霊碑にも刻まれており、再利用ではなく作り直しが選択されたのだと思われる。戦没者名は『知念村史』にも掲載されているが、「大東亜戦々没者」プレートと『知念村史』とでは文字に違いがある。新たにできた慰霊碑の戦没者名をみると、「大東亜戦々没者」プレートと同じ文字表記となっており、転記利用されたことがうかがえる。また後者の「慰霊之塔建立寄付者芳名」プレートは再建慰霊碑とは直接関係がないため、再利用はなされなかったのもうなずける。ただ、これらのプレートが依然として公民館の脇に置かれていた点が印象的であった。

2012年6月26日に再度、吉富区を訪れた際も、これらのプレートは保存されていたが、反対向けに重ねられ、マンホール蓋がその上に置かれていた（写真10）。残念ながら1つ（「大東亜戦々没者」と思われる）は割れており、文字面を確認することは困難であった。置かれている状況を鑑みると、地域住民の方のなかでも、これらのコンクリート片が何であるかを記憶している人は少なくなっているのではないだろうか、と感じられた。よって、ここにあって記しておく次第である。



写真10 吉富区の以前の慰霊碑に添えられていたプレート

撮影：上杉和央（2012年6月26日）

なお、吉富区の慰霊祭は2012年6月23日に「地理学実習」の一環で調査を実施したが⁽⁴²⁾、区長挨拶・黙とう・遺族代表あいさつ・焼香という流れであった。聞き取りによれば、以前の慰霊碑の時には、6月23日をずらして慰霊祭を実施していたということであった。これは『知念村の御嶽と殿と御願行事』の内容にも符合する⁽⁴³⁾。ただ、『知念村史』には6月23日実施の地区に含まれており⁽⁴⁴⁾、やや齟齬がみられる。いずれにせよ、再建された後は6月23日での実施である。

(6) 久手堅区

久手堅区の慰霊碑「慰霊之塔」(ID20)は自然石を利用した形状で（写真11）、台座裏面に「昭和五十九年八月十二日建立」というプレートがはめ込まれており、1984年の建立であることが分かる。台座前面には「大東亜戦争戦没者」プレートがあり、軍人・軍人軍属・一般に区分されて、それぞれ名前が刻まれている。

しかし、表1の各種資料には建立が1955年8月と、また『知念村史』では建立は「一九五五・八・二五」と表記されており⁽⁴⁵⁾、現在の慰霊碑とは異なる年月日が記されている。この点も含め、

2002年12月10日および2003年6月27日に、久手堅在住で知念村史編集委員会の委員長を務めた新垣源勇氏に、久手堅区の慰霊碑・慰霊祭について聞き取りを行った。

新垣氏によれば、現在の慰霊碑は再建されたものであり、以前はコンクリート製のものであったという。その建立が1955年8月であり、建立場所も今の場所から少し離れた場所にあったということである。ただ、国道整備の過程で旧建立地からの移設が必要となり、現在地に移すことになった。その年代ははっきりとはしなかったが、その際に再建されたのが現在の慰霊碑であり、そうであれば移設時期は1984年となる。



写真 11 「慰霊之塔」旧知念村久手堅区
撮影：上杉和央（2007年6月24日）

本来建立されていた場所は集落の入口に位置しており、また海が見える場所でもあった。海の眺望については、ニューギニアやブーゲンビルなどへの移民が多く、そこで亡くなった者も多いために「海の見える場所」に慰霊碑が設置されたのだ、と説明してくれた。移民戦没者への意識については、別の資料による検証が必要ではあるが、この「海の見える場所」というのは山里区、吉富区のほか、後述の安座真区、知名区、海野区、久原区にも共通する特徴である。

2002年時点において久手堅区の慰霊祭は旧7月16日に実施されていた⁽⁴⁶⁾。慰霊祭は15時から始まり、遺族30名ほどが集まるということであった。区長や遺族会長（知念村・当時）のあいさつと参列者による焼香があるということで、他の地区と同じようなスタイルかと思われる。

久手堅区では旧7月16日の夕方から夜にかけて「ヌーバレー」が実施される。慰霊祭の実施日は「ヌーバレー」に合わせて決められたとみてよいだろう。同じように「ヌーバレー」が実施される知名区や安座真区では、慰霊祭が連動することはなく、久手堅区の特徴となっている。同じような事例としては、たとえば旧盆最終日（旧7月15日）の「ウークイ」（お送り）の日に実施される「エイサー」の前に慰霊祭が実施される旧勝連町（現うるま市勝連）南風原区の例があげられるだろう。これらはいずれも霊を送る行事であるが、亡くなった者に対する行事である戦没者慰霊を同じ日に設定することは、むしろ自然なことであるのかもしれない。ただし、久手堅区においては（また旧勝連町南風原区においても）伝統的な行事と完全に同化ないし融合するのではなく、その行事とは別個に「慰霊祭」が実施されており、戦没者慰霊が一般的な先祖供養とは異なる要素を持つと認識されていることがうかがえる点で重要である。

（7）安座真区

安座真区の慰霊碑は「安久仁の塔」（ID6）という（写真12）。裏面に「一九五一年三月四日竣工」とあるように、旧知念村域でもっとも早くに作られた慰霊碑である。下部の台座には「戦没者氏名」（日露戦争戦没者・支那事变戦争戦没者・大東亜戦争戦没者）、および「大東亜戦争戦傷病者

戦没者」のプレートが据えられている。ただし、これらのプレートは明らかに後年のものである。

現在は集落背後の高台で崖状になっている場所の下に建っているが、2002年12月10日に付近を歩く古老に聞いたところ、以前はその一段下にある公民館横の広場（ゲートボール場）のあたりにあったという。

同じく慰霊祭についても尋ねたが、2002年時点では140～150名程度が参加する慰霊祭が実際されているとのことであったが、日時は判然としなかった。人数については、その「10年くらい前まで」は遺族だけで実施していたということであり、もっと少なかったということである。この遺族のみの実施から区民全体での実施という変化は、次の知名区と同じである。



写真12 「安久仁の塔」旧知念村安座真区
撮影：上杉和央（2007年6月24日）

(8) 知名区

知名区の「英魂之塔」(ID10)は集落南西の山麓から少し登ったところにある知名農村公園にある⁽⁴⁷⁾ (写真13)。裏面には「一九五二年五月卅日建立」とあり、下段には「戦没者氏名」プレートがあり、日露戦争・支那事変・大東亜戦争で亡くなった軍人80名、および大東亜戦争従軍看護婦5名が刻まれる。なお、プレートは黒御影石製であり、建立当時のものではないと推察される。



写真13 「英魂之塔」旧知念村知名区
撮影：上杉和央（2007年6月24日）

2002年12月10日に慰霊碑近くの民家の古老に尋ねたところ、慰霊祭は五月末の日曜に実施するということであった。ただし、「本当は30日」ということであり、建立日が慰霊祭の日となっていたことがうかがえた。5月30日というのは、アメリカのMemorial Day（戦没将兵追悼記念日）にあたる⁽⁴⁸⁾。周知のように1972年5月15日まで沖縄はアメリカの施政権下に置かれた。そのため、公休日等の設定もアメリカ国内に準じていた。地域にMemorial Dayの意味が浸透していたかどうかについては、たとえば1984年に元琉球政府文教局長の中山興真氏が1954年当時の宜野座中学校での慰霊祭について「どうして五月三十日だったの理由は分からないが、私の手元にある資料ではたしかに五月三十日」⁽⁴⁹⁾と述べているように、疑問が残る。ただ、この事例のほかにも、たとえば1952年の三和村（現糸満市）内の16の区にある納骨所で「五月三十日には全犠牲者」⁽⁵⁰⁾を追悼する慰霊祭が実施されることが報告され、また羽地村（現名護市）でも「毎年五月三十日に例祭」⁽⁵¹⁾が挙行されるなど、5月30日が機能していたことは確かである。また1992年段階において読谷村喜名区の慰霊祭は5月30日に実施されていたが、その理由を「復帰前は米軍が

行う五月三十日が慰霊祭の日だった。それでその日が慰霊の日となっている」と語っている記事も見える⁽⁵²⁾。すなわち、沖縄全体に深く浸透したかどうかは別として、少なくとも1972年までは沖縄で戦没者——ただし戦没軍人のみである——を追悼する「公的」な記念日として5月30日という日付も存在したことは明かである。ここで挙げた例のほかにも、沖縄県内の調査をしていると、5月30日に建立された慰霊碑が意外に多いことに気がつくのだが、その背景にはこのような戦後沖縄の状況がある。

さて、2002年の時点で、知名の慰霊祭は150～200名が参加するということであった。「4～5年前」までは遺族のみであったが、それ以降は区民が参加するようになったのだという。これはおそらく遺族会主催から区主催へと変化したのだと思われる。

なお、慰霊碑の立つ知名農村公園は平成8年度(1996)に整備されたものだが、ここでは旧7月16日に「ヌーバレー」が実施される。「ヌーバレー」は本島南部(島尻)のいくつかの地域で実施されている行事で、旧盆でやってきた無縁仏をあの世に帰すものと言われている。旧知念村域では知名区をはじめ、前述の安座真区や久手堅区に残り、現在なお盛んに実施されている。

(9) 海野区

海野区の慰霊碑は「邦守之塔」(ID12)である(写真14)。碑の裏側には「一九五三年五月三日建立」とあり、また下段には「大東亜戦争戦没者指名」のプレートに軍人軍属35名が刻まれている。海野の集落は国道331号の北側に位置しているが、慰霊碑は南側にあり、大きな岩の上を整地する形で作られている。

慰霊祭については、2002年12月10日に慰霊碑の脇にある畑地で作業をされていた古老に話を聞いたところ、「ハーリーの頃」に実施され15名くらいが参加する、ということであった⁽⁵³⁾。



写真14 「邦守之塔」旧知念村海野区
撮影：上杉和央(2007年6月24日)

(10) 久原区

久原区の集落の背後にある山を少し登ったところに闘牛場がある。斜面を利用した観客席が設けられているが、慰霊碑「忠魂之塔」(ID14)はその闘牛場観客席の上側に位置している(写真15)。2003年12月10日に集落内にいた古老に話を聞いたところ、慰霊碑の場所は区有地であるということであった。慰霊碑の中段部の前面や底部に張り出す部分にはタイルによる装飾が施されており、非常に美しい。区自治会が管理する慰霊碑のなかで、このようなタイル装飾が施された慰



写真15 「忠魂之塔」旧知念村久原区
撮影：上杉和央(2003年6月29日)

霊碑は他にないのではないだろうか。なお、中段には「支那事变大東亜戦争戦没者氏名」のプレートがあり、44 名の名前が刻まれている。また、慰霊碑の裏側には「一九五三年十一月十八日建立」というプレートが付されている。

久原区については、2003 年 6 月 29 日（日）16 時から行われた慰霊祭を調査したことがある。その時参加した区民は 47 名で、世代は自治会役員を除けばほぼ老年層であった。拝礼、黙とうの後、区長・遺族会長（知念村）・遺族代表のあいさつがあり、参加者が順に焼香をして終了となる。慰霊碑前に簡素な祭壇が作られたが、供物は特に置かれず、焼香用の香炉が二基据えられただけであった。慰霊祭終了後、慰霊碑前のスペースにブルーシートが敷かれて懇親会となった。参加者は車座に座り、配られた飲み物や菓子を片手にたがいに話をしていた。その際に遺族代表で挨拶を行った大城盛清氏（当時 97 才）に話を聞いたところ、「忠魂之塔」の建立は区民全員の奉仕活動によってなされたということであった。

久原区の慰霊祭で興味深かったのは、男性と女性が自然と別れる形で並んだ点である。慰霊碑に向かって右側が女性、左側が男性であり、夫婦で参加していた区民も、慰霊祭の際は違う場所にいた。また、慰霊祭後の懇親会も男性と女性は別となっていた。この点を尋ねても、いつでも自然にこうなる、ということであった。

（11）沖縄刑務所

具志堅区に位置している沖縄刑務所には 2 基の慰霊碑が並んで建っている。1 つは「殉難職員慰霊之碑」（ID31）、もう 1 つが「戦没収容者慰霊碑」（ID30）である。

前者の「殉難職員慰霊之碑」については、左側に殉難者 28 名の名前、右側には設立経緯がきざまれている。建立年月日はないが、各書では 1979 年 3 月となっている（表 1）。ただし、この建立年は再建時のものであろう。というのも、沖縄刑務所は 1978 年に那覇市楚辺から現在地に移転してきたのだが、それ以前、1961 年 6 月 11 日の『琉球新報』に「殉職刑務所職員慰霊祭が十日午後三時から那覇市楚辺の沖縄刑務所内慰霊塔前で行われた」⁽⁵⁴⁾と記されているからである。記事には慰霊祭の様子を映した写真も掲載されているが、現在のものとは異なっている。また、『沖縄タイムス』1970 年 6 月 11 日付紙面⁽⁵⁵⁾にも「沖縄刑務所職員殉職者慰霊祭」の様子が記されている⁽⁵⁶⁾。

「戦没収容者慰霊碑」は建立年月日が刻まれているが、一部は判読が難しくなっており、「昭和四十□年十□日建立」ということしか明らかにしえない。いずれにしても、昭和 40 年代の沖縄刑務所は那覇市楚辺に位置していたのであり、この慰霊碑は刑務所の移動に際して移転させられたものであることが分かる。ほかに「所長 生存者一同」と刻まれている。

2008 年 6 月 30 日に現地見学を行った際、慰霊祭の状況を尋ねてみたところ、日は決められていないが例年 6 月中に関係者（職員・OB）の参加のもとで実施されているということであった。

4 南城市域の特徴——結びにかえて——

小稿では、戦後沖縄のなかで重要な位置づけにある「沖縄戦の記憶」のなかでも、これまで見過ごされてきた地域住民の関わる慰霊碑・慰霊祭について、南城市を事例に、現地での聞き取り調査や現地見学の成果をまとめた。具体的な調査成果については、調査が比較的すすんでいる旧玉城村域と旧知念村域にかぎって触れ、旧大里村および旧佐敷町は概観での言及にとどめたが、とくに旧玉城村域と旧知念村域については地域ごとに多様な慰霊碑・慰霊祭の変遷と実態があることについて、多少なりとも、ひも解くことができたのではないかと思う。

最後に調査のなかで見てきた本地域の特徴に触れておきたい。

まず、慰霊碑であるが、南城市域の慰霊碑の建立年代は戦後直後からごく近年までと、多様な年代が確認できるのが特徴である。また、納骨堂に付随した慰霊碑や、当初から遺骨とは関係なく建てられた慰霊碑、移転・再建された慰霊碑など、バリエーションに富む慰霊碑があるのも特徴である。たとえば、沖縄県内で最大の慰霊碑数を誇り、最後の激戦地としても知られる糸満市域の場合でも、こと区自治会管理の慰霊碑に限定するならば、慰霊碑の建立年代は限定される。その他の市町村の場合であれば、納骨堂としての建立が見られない、1940年代もしくは1980年代以降の建立がないといったことになる。言うならば、南城市は多様な慰霊碑のタイプを確認することができる点で、沖縄県の縮図的な地域なのである。その意味でも旧大里村、旧佐敷町の調査は速やかに実施する必要があるだろう。

一方、少なくとも調査できた区自治会の慰霊祭については、その内容は類似したものであったと言えるだろう。他市町村の慰霊祭と比較して端的に言うならば、きわめて簡素な慰霊祭、となる。その理由の一つは、基本的に遺族を中心とした区民のみで実施されており、僧侶の読経が見られないという点である。他の市町村の場合、区自治会主催の慰霊祭に僧侶の読経があることも、まま見受けられるのだが⁽⁵⁷⁾、南城市域では式次第に明確に読経が位置づけられている例は確認できなかった⁽⁵⁸⁾。

このように近隣地域の慰霊祭が類似するのは、その内容についての情報の交換がなされているからであろう。実際、本文でも述べたように、旧玉城村・糸数区の場合は、慰霊祭を実施するに当たり、周辺の区の事情を調査している。また、少なくとも2003年時点においては、旧知念村の慰霊祭の場合、知念村遺族会の会長はすべての慰霊祭に出席することになっていたため⁽⁵⁹⁾、旧村域の慰霊祭についての式次第については、情報が交換されうる状況があったことになる⁽⁶⁰⁾。

さらに、南城市の慰霊碑・慰霊祭のなかの大きな特徴と言えるのが、町村合併に伴う慰霊碑・慰霊祭の扱いである。先述の通り、2010年に新たな市域を単位とした慰霊碑が建立された。それによって、それまでの町村単位で建立された慰霊碑は役割を終えたことになるが、現時点ではすべて残されている。今後、これらの慰霊碑がどのように扱われていくのかについては、注意深く見ておく必要がある。

この点を含め、南城市域の慰霊碑・慰霊祭については、今後とも継続的な調査が必要であろう。

旧大里村および旧佐敷町についての調査を最優先としつつも、南城市全体についての調査を続け、その成果を他地域と組み合わせながら沖縄戦後史を考えていくことにしたい。

付記 本稿の作成にあたって、知念準様をはじめとする南城市教育委員会文化課市史編さん係の皆様（2012年）、新垣源勇様（2003年）、大城盛清様（2003年）、南城市糸数区・前川区・志喜屋区・知念区・吉富区・久原区の皆様（2003年・2012年）、沖縄刑務所職員の皆様（2008年）には聞き取り調査に応じいただき、大変お世話になりました。末尾ながら感謝申し上げます。また、井口学氏からは貴重な資料の提供に加え、普段から慰霊碑・慰霊祭調査に対して大きな示唆を授けていただいておりますこと、深く感謝申し上げます。

なお、本稿の成果の一部は、2007～2009年度科学研究費（若手研究（B））「沖縄における戦争慰霊碑と慰霊祭の地域的特徴の解明」（研究代表者：上杉和央）を利用したものである。

注

- （1）知念村史編集委員会編『知念村史 第三巻 戦争体験記』知念村役場、1994。
- （2）なお、玉城村史編集委員会編『玉城村史 第六巻 戦時記録編』（2004）には、「慰霊之塔」および「大東亜戦争 沖縄戦線戦没者之墓」が口絵に掲載されている。ただし、後者はアブリラガマ（糸数壕）の写真の一枚としての掲載であり、いずれの慰霊碑も本文での言及はない。
- （3）①拙稿「那覇から摩文仁へ——復帰前沖縄における「慰霊異空間の中心」二十世紀研究7、2006、29-52頁、②拙稿「記憶のコンタクト・ゾーン——沖縄戦の「慰霊空間の中心」整備をめぐる地域の動向——」洛北史学11、47-72頁。
- （4）2010年度は6月22日～25日に中城村、2011年度は6月21日～26日に浦添市で、それぞれ現地調査を実施した。その成果は次の報告書にまとめられている。①京都府立大学文学部歴史学科文化遺産学コース（上杉研究室）『中城村』2011、②京都府立大学文学部歴史学科文化遺産学コース（上杉研究室）『浦添市』2012。
- （5）2012年度「地理学実習」では学生・院生による慰霊祭調査を実施した。その成果については報告書として刊行予定であるので、そちらも参照していただきたい。京都府立大学文学部歴史学科文化遺産学コース（上杉研究室）『南城市』2013（刊行予定）。
- （6）南城市域に関わる調査は、2012年6月19～26日に加えて、2002年12月7日～10日、2003年6月22日～7月1日、2007年5月28日～31日、2007年6月22日～7月2日、2008年6月22日～30日に実施している。
- （7）①拙稿「中城村の慰霊碑」（前掲4、①）60-73頁、②拙稿「浦添城跡の慰霊碑」（前掲4、②）84-93頁。
- （8）前掲3、②。
- （9）『琉球新報』2009年3月20日35面「壕のさい銭箱盗難 アブリラガマ 住民ら「返して」 南城市玉城」
- （10）聞き取り調査の内容については、安藤都「糸数地区の慰霊碑・慰霊祭」（前掲5所収）も参照のこと。
- （11）沖縄県遺族連合会編『還らぬ人とともに』沖縄県遺族連合会、1982年、214-217頁。
- （12）中央納骨所の設立経緯については、前掲3、①を参照。

- (13) 前掲 3、②。
- (14) 納骨堂から遺骨を転骨した後に慰霊祭が実施されなくなった事例は、糸満市で確認できる。前掲 3、②。
- (15) 聞き取り調査の内容については、多岡佳祐「前川地区の慰霊碑・慰霊祭」（前掲 5 所収）も参照のこと。
- (16) 玉城村前川誌編集委員会『玉城村字前川誌』1986。
- (17) 前掲 16、巻頭頁。
- (18) 付近にあった岩を転用して慰霊碑とした点については、2012 年 6 月 23 日の聞き取りにおいても確認することができた。
- (19) 前掲 3、①。
- (20) 『沖縄タイムス』1971 年 7 月 24 日 11 面「玉城村 慰霊塔除幕式と慰霊祭を行う」。
- (21) ①『琉球新報』1956 年 11 月 22 日 3 面「御知らせ」。②『沖縄タイムス』1956 年 11 月 22 日 3 面「お知らせ」。
- (22) 南城市ウェブサイト内「ようこそ市長室へ（平成 22 年 6 月）」記事。<http://www.city.nanjo.okinawa.jp/about-nanjo/introduction/mayor/log/226.html>（最終検索日 2012 年 10 月 27 日）。
- (23) 南城市ウェブサイト内「ようこそ市長室へ（平成 23 年 6 月）」記事。<http://www.city.nanjo.okinawa.jp/about-nanjo/introduction/mayor/log/236.html>（最終検索日 2012 年 10 月 27 日）。
- (24) 南城市ウェブサイト内「ようこそ市長室へ（南城市戦没者慰霊祭（2012/06/22）」記事。<http://www.city.nanjo.okinawa.jp/about-nanjo/introduction/mayor/log/20120622.html>（最終検索日 2012 年 10 月 27 日）。
- (25) この理由の一端には、納骨堂の建立とその整理がある。旧知念村域は激戦地からはやや離れた位置にあり、本格的な納骨堂の建設は確認できない。前掲 3、①。
- (26) 前掲 1、287 頁。
- (27) 知念村文化協会学術部編『知念村の御嶽と殿と御願行事』南城市知念文化協会、2006。
- (28) 前掲 27、30-31 頁。
- (29) 前掲 1、288 頁。
- (30) 前掲 27、30-31 頁。
- (31) 大井雅晴「志喜屋地区の慰霊碑・慰霊祭」（前掲 5 所収）。
- (32) 「慰霊の日」が公的に定められたのは 1961 年だが、当初は 6 月 22 日とされていた。それが 1965 年になって 6 月 23 日に改められた。なお、「6 月 23 日」をめぐる沖縄の輿論の変遷と意味については、福岡による明快な検討がある。福岡良明「沖縄における「終戦」のゆらぎ」（佐藤卓己・孫安石編『東アジアの終戦記念日——敗北と勝利のあいだ——』筑摩書房、2007）85-118 頁。ただし、福岡の議論にはアメリカの Memorial Day である「5 月 30 日」が沖縄にも敷衍された点については言及がないようである。本文にもあるように、戦後直後の沖縄には「5 月 30 日」もあった。
- (33) 2003 年 6 月 25 日に現地を訪れ、地域の住民に場所を尋ねた際、慰霊祭をする前に刈ったから慰霊碑までは通れると言っていたが、おそらく 2012 年も同じく慰霊祭前に慰霊碑までの道については草を刈りこんだのであろう。
- (34) 前掲 27、57-59 頁。
- (35) 前掲 1、278 頁。
- (36) 現在の知念区は、知念村と波田真村が合併したものである。波田真殿については、前掲 27、123-125 を参照のこと。
- (37) 松浦智博「知念地区の慰霊碑・慰霊祭」（前掲 5 所収）。
- (38) 前掲 1、293 頁。
- (39) 深澤茜「吉富地区の慰霊祭」（前掲 5 所収）。
- (40) 前掲 1、287 頁。
- (41) なお、『知念村史』（前掲 1）の口絵に掲載される写真には日付が印字されており「6 8 '94」とある。農村総合整備モデル事業が 1994 年度であることをふまえると、この口絵写真は初代慰霊碑の最末

期の頃の写真ということになる。

- (42) 前掲 39。
- (43) 前掲 27。
- (44) 前掲 1、287 頁。
- (45) 前掲 1、287 頁。ただし、村史記載の年月日については若干の留保が必要である。というのも、同頁には旧知念村域の慰霊塔のすべての建立年月日が記載されているが、久原区と知念区では村史の記載年月日と慰霊碑に刻まれた年月日が異なっており、村史に明らかな誤記が散見されるからである。
- (46) 新垣氏は旧 7 月 16 日と述べる時と旧 7 月 17 日と述べる時があり、聞き取りでは特定できなかったが、ヌーバレーと一緒に実施されるということから旧 7 月 16 日の可能性が高いと思われる。
- (47) 知名農村公園は 1996 年度の農村総合整備事業で整備された。
- (48) ただし、アメリカでは 1971 年からは 5 月最終月曜日と変更された。
- (49) 『琉球新報』1984 年 6 月 23 日 4 面「5 月 30 日が「慰霊祭」だった」。
- (50) 『琉球新報』1952 年 2 月 15 日 3 面「遺骨は鄭重に合祀 “野ざらし” の報道は誤解招く 三和村の納骨所視る」。
- (51) 『沖縄タイムス』1956 年 5 月 31 日（夕刊）3 面「羽地村で慰霊祭」。
- (52) 『沖縄タイムス』1992 年 6 月 23 日 21 面「5 月 30 日が「慰霊の碑」 読谷村喜名」。
- (53) ハーリーは旧 5 月 4 日に開催されるが、たとえば 2012 年の場合、海野ハーリーは 6 月 24 日（日）に実施された。これは旧 5 月 5 日にあたり、旧 5 月 4 日に近い日曜日が設定されている。
- (54) 『琉球新報』1961 年 6 月 11 日 7 面「殉難刑務所職員の慰霊祭」。
- (55) 『沖縄タイムス』1970 年 6 月 11 日 10 面「殉職刑務官の慰霊祭 きのうしめやかに」。
- (56) なお、『沖縄タイムス』1951 年 8 月 9 日付の紙面には「沖縄刑務所戦没職員七年忌慰霊祭」を 8 月 12 日に実施する告知文が出ているが、慰霊碑の有無を確認することはできない。『沖縄タイムス』1951 年 8 月 9 日 2 面「沖縄刑務所戦没職員七年忌慰霊祭」。
- (57) たとえば、浦添市域の場合、1 つの区自治会を除き、慰霊祭を実施するすべての区自治会では僧侶を招き、読経をあげてもらっていた。前掲 4、②。
- (58) 旧玉城村前川区の慰霊祭には僧侶が参加しているが、本文に記したように、例外的であり、かつ慰霊祭の式次第に読経は含まれていない。
- (59) 2003 年 6 月 27 日、久原区の慰霊祭での聞き取りによる。
- (60) なお、2012 年 6 月 23 日の志喜屋区での聞き取りによると、例年は「遺族連合会知念支部会長」が参加していたが、今年は県主催の慰霊祭に参加する関係で参加できなかった、ということである。同じく、6 月 23 日に慰霊祭があった知念区、吉富区においても参加されていなかった。ただ、志喜屋区の調査をふまえれば、都合さえあれば、会長は参加する、ということであろう。2012 年は 6 月 23 日が土曜日だった、という点もふまえる必要がある。前掲 31・37・39。

(2012 年 11 月 15 日受理)

(うえすぎ かずひろ 文学部歴史学科准教授)